

『自動運転と法』

(A.K.・20代・法科大学院修了生)

ここ数年、AIが「ブーム」であるように感じる。本書で扱われる自動運転だけでなく、これもまた「ブーム」といえる将棋対戦ソフトや、AIに人間の職業が放逐されるのではないかという報道など、話題に事欠かない。

一方で、AIを含めた先進技術に対する法規制は、その進歩のスピードに追いついていないともよく言われる。本書は、実現しつつある自動運転社会において必要な法規制について、現行法を出発点として検討を行い、さらに立法論的な課題を示すものである。

私は、近い将来法曹になる身として、ほぼ確実に直面するだろう自動運転と法の関係について、AIブームに乗っかって興味を持っていたので、本書を興味深く読んだ。

本書が扱う内容は、行政的規制に加え、自賠法の責任、製造物責任、情報提供者の責任、保険などの民事責任であり、問題になりうる典型場面を網羅的に概説している。具体例や必要な前提知識も適宜記載されており、短時間でその内容を把握することができた。なお、刑事責任は検討の対象になっていない。

自動運転社会は確実に実現されるのだから、法曹としては「知らなかった」では済まされない。今のうちに読んでおくべき1冊としても、本書を薦めたい。

『法学教室』2018年5月号(No.452)掲載「Reader's Voice」より